

## ■ 当面の「ドル安」余地はもはや限られてきている！？

ちょうど1週間前の2月27日、NYダウ平均は再び1000ドル超の下げを演じ、それを受けたドル/円（日足）は、長めの陰線を描きながら一つの節目である110円処を下回る水準まで下落した。この日は、カリフォルニア州知事が「新型肺炎ウイルス感染で8400人が監視対象になっている」と公表しており、その結果、米国内におけるウイルス感染拡大の影響に対する懸念が一段と強まったことが大きいと見られる。

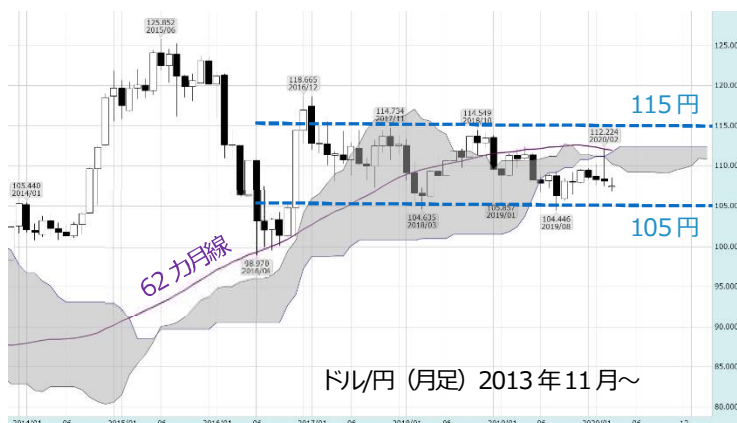
さらに、翌28日には米連邦準備理事会（FRB）のパウエル議長が追加利下げの可能性を示唆したことを受けて米10年債利回りが一時1.1143%と過去最低水準にまで低下。そうしたことを背景に、ドル/円は一時108円を下回るレベルにまで下落した。

結果、先週の週足ロウソクはかなり長めの陰線となり、あろうことか前週に上抜けたトライアングルの上辺（2015年6月高値と以降の高値を結ぶ上値抵抗線）下抜けてしまったうえ、一目均衡表の週足「雲」上限、62週移動平均線（62週線）といった複数の重要な節目をも次々に下抜ける格好となったのである。

前回更新分の本欄では、トライアングル上辺や週足「雲」上限あたりの水準が「とりあえず心理的サポートになり得る」と想定したが、残念ながらウイルス感染拡大力の強さと、それに対する市場の動揺の大きさには抗しきれなかった。思えば、ドル/円が112円台まで値を上げる展開となったのは、つい先々週のことである。結果として、2015年6月から長らく形成してきたトライアングルをついに上放れたと思ったのも束の間、3月2日には一時107円をも割り込む場面を垣間見るといふ、足下の相場のボラティリティーの高さにはただ驚くよりない。

市場関係者のなかには、トライアングル上放れなどといった強気転換のパターンが一度目の当たりにされた後、さしたる間もなく、それを打ち消すような展開となった場合は「むしろ弱気の流れがより強くなりやすい」とする向きもある。確かに、投資家の心情的には、かなりの「裏切られた感」があるわけで、ポジション整理に伴って一旦売り戻す動きから、さらに下値を狙って売り仕掛ける動きにつながってもおかしくはないのかも知れない。

ただ、パンデミックに発展し得る感染症の拡大などというのは、言うまでもなく異常事態なのであり、そこをあまり拘り定規に捉えてはならないとも思う。テクニカル分析の観点からの見立てが必ずしも外的外れだったわけではないし、結果的に想定外の展開になったからといって、テクニカル分析自体を否定するものでもない。繰り返すも、目下は異常事態なのである。



とまれ、ここであらためてドル/円の推移を「鳥の目」で俯瞰してみると、大よそ105-115円のレンジ内で横這いの展開を続けていると見ることもできそうである（左図参照）。

今後もしばらくは一目均衡表の月足「雲」や62カ月移動平均線が上値の重しになりやすいと見られるが、それだけに、それらの節目を上抜ける展開となっ

てきた場合には、そこから一段の上値を追う展開へと一気に転じると想定することもできる。

一方で、このところのドル安を背景に値を戻してきたユーロ/ドルについては、そろそろ戻り一巡となる可能性が高まっているように思われる。今週のユーロ/ドルの週足ロウソクが週足「雲」下限や62週移動平均線に上値を押さえられる格好となっていることは確かであるし、ユーロ圏の域内景気の先行きが依然不透明であることに変わりはない。よって、当面の「ドル安」余地はもはや限られてきていると思われる。

（03月05日 10:30）